

令和7年度 徳島中学校 総括評価表

	自己評価				総合 認定	学校関係者評価	次年度への課題と今後の方策	
	重点課題	重点目標	活動計画	評価指数		評価指数の達成度および所見		学校関係者の意見
学校経営	地域とともにある学校として、教育活動の充実を図るとともに、生徒や教職員にとって、自己実現のできる学校をめざす。	1. 保護者や地域の人々の意見や要望を大切にされた学校運営をめざす。 2. 生徒や教職員が自他の存在を認め合い、各自が目標を持ちそれに向けて実践することで学校の活性化を図る。	1. 学年だより・ホームページ等による積極的な情報発信とともに、現状に則した学校行事の工夫やれんらくアプリ等の積極的活用で、身近で開かれた学校づくりへの理解と連携を深める。 2. 生徒相互・教職員相互で協力し合い、各自の目標が達成できるよう、主体的に活躍できる場を設定する。	1. 学校から発信する各種たよりや文書等により、保護者に対して十分な情報を伝えることができていると思う保護者が、90%以上いる。(アンケート調査) 2. 学校において自分の活躍の場があり、仲間と協力できていると感じている生徒・教職員の割合を100%に近づける。(アンケート調査)	B	○学校からの情報発信については、97%の保護者が、学校から保護者に対して十分な情報を伝えることができていると受け止めており、昨年度同様に目標を達成することができた。今年度も、学校ホームページを毎日更新し、一層の工夫・充実に努めたことと、すぐるを活用することで、学校からの連絡文書が確実に保護者の手元に届くようになったためと考えられる。 ○生徒に対するアンケートでは、93%が「楽しい学校生活を送っている」と回答した。その一方、「あまりそう思わない」と答えた生徒が7%いることから、より一層、生徒の思いや願いに十分寄り添えるような手立てを継続していく。また、「学級の役割や係活動について十分取り組めた」と感じている生徒は94%であった。学校行事や委員会、各学年等における活動をより活性化させ、多様な生徒が活躍できる学校を創出させることで、生徒が担う役割の増加や充実、新しい取組への挑戦により、達成感や有用感を味わえる機会が増加していると推測できる。	○一人一人を生かす教育活動ができおり、高く評価する。自尊心を高め、子どもたちの居場所となる学校運営を続けていってほしい。 ○保護者や地域の人々の意見や要望を大切にされた学校運営がすすめられている。今後、地域に信頼される学校運営をお願いしたい。	○教職員に対するアンケートでは、すべての教職員が「同僚と協力しながら楽しく仕事できた」ととらえている。しかし、「そう思う」と捉える割合も一定数あるので、今後、一人一人の教職員が、メンタルヘルスの保持増進や、ワークライフバランスを積極的にはかることのできる『風通しの良い職場環境づくり』を推進し、職場の仲間が互いに連携・協働・サポートしあえるような職場環境づくりに一層努めていきたい。加えて、全教職員が責任と自覚をもって教育活動に積極的に取り組み、生徒一人一人に向き合い、教育の質の向上に努めたいと考えている。 ○情報技術の進歩と共に情報の公開方法も難しくなっている。時代の流れに即した、情報公開のあり方を検討したい。
教科指導	生徒一人一人がわかる喜びを実感できる授業実践をめざす。	1. 生徒が知識・技能を習得できるような授業・支援を行う。 2. 生徒の思考力・判断力・表現力等を育成する。 3. 学習課題に対して、自己調整を図りながら粘り強く考え、自ら取り組むことができる生徒を育成する。	1. 各教科で個別の知識・技能を身につけさせるための手立てを検討し、実践する。 2. 各教科で多様な学びの場の効果的な設定や生徒の思考を深めるための手立てを検討し、実践する。 3. 学習意欲向上のための手立てを共有し、実践を行う。また、デジタルとアナログを効果的に組み合わせ、生徒が自身の成長や課題を把握し、次の段階に進めるような取り組みを行う。	1. 「授業がわかる」生徒が80%以上、知識・技能を身につけさせる手立てを行った教職員の割合を100%に近づける。(アンケート調査) 2. 「話し合い活動などを通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができた」生徒が80%以上、生徒の思考を深めるための手立てを行った教職員が90%以上いる。(アンケート調査) 3. 「学習課題に対して、主体的に取り組めた」生徒が80%以上いる。(アンケート調査)	B	○「授業の重要な点を理解し、学んだことを生かして課題に取り組んでいる」について「そう思う」「ある程度そう思う」が84%、知識・技能を身につけさせる手立てを行った教職員の割合を100%であった。知識・技能についての目標を達成できた。 ○話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり広げたりできている」生徒が83%、生徒の思考を深めるための手立てを行った教職員が97%であった。 ○「授業で大切な点を意識しながら、分からないことがあっても自分なりに考えたり工夫したりして、学んだことを生かそうと粘り強く学習に取り組んでいる」生徒が80%、「生徒を『認め育てる』肯定的な学習指導」を行った教職員は97%であった。 ○生徒の平日の家庭学習は3時間以上が19%、2～3時間が30%、1～2時間が33%、1時間未満が18%という結果であった。	○教科指導に関して、生徒の知識・技能や思考力・判断力・表現力等を育む授業ができています。多様な力を育む学校の取り組みを期待している。	○授業理解は概ね良好である一方、約2割の生徒の基礎的・基本的事項の定着が不十分である。個別最適な支援の充実が課題である。また、話し合い活動を通して考えを深める力は生徒の実感としては高まっているものの、現状、自分の意見を言いあって深まりのないまま終わってしまったり、特定の生徒の意見にすぐに賛同してしまったりする場面も見られる。次年度は、発問の工夫や話し合い活動における目標設定、思考を深める場を意図的に設定することが必要であると考えられる。さらに、家庭学習時間の確保を促す仕組みづくりを進め、学習習慣の定着と学力の底上げを図る。
人権教育	自他のよさを認め合い、すべての生徒の自立と自己実現のできる人権教育をめざす。	1. さまざまな人権問題の解決に向けて主体的な行動力を育成する。 2. 自分を大切にし、自尊感情を育てることで、前向きに生きる態度を養う。	年間指導計画を見直し、授業や体験的活動および行事を充実させる。	1. 自分が大切にされていると感じている生徒が80%以上いる。(アンケート調査) 2. 相手を尊重した言動ができていると感じている生徒が80%以上いる。(アンケート調査)	B	○今年度は、各学年での人権意見作文発表会、全体での人権意見作文発表会、人権落語講演会をすべての学級・学年で実施し、人権意識の高揚を図った。また、学年によっては助産師を招いてのちの授業に取り組んだ。各教科等でも人権学習を取り扱い、自他を尊重するための態度を養えるよう取り組んだ。その結果、自分が大切にされていると感じている生徒は89%であり、目標を達成できており、本校の生徒は、中学校生活を通して自他を尊重する態度を身につけることができていると言える。	○さまざまな理由で学校に来られず不登校となっている生徒への対応を今後もお願いしたい。また、学校評価にそれらの子どもたちの意見も反映することもお願いしたい。	○これまでは道徳科や学級活動の授業を中心に人権学習を進めることが多かったが、人権教育・人権学習は学校教育全体で行うべきであり、人権学習に取り組む時間を各教科の中でどのように設定していくのがこれからの課題となっている。 今後教職員は人権意識向上の研修に努め、「人権」の視点を軸にした指導を継続していくよう心がけなければいけない。また、各教科担当が連携し、教科を越えて人権について学べるカリキュラムづくりを進めていきたい。

道徳教育	豊かな感性と道徳性の育成をめざす。	人として、ともによりよく生きていこうとする生徒を育成する。	「新しい道徳」を活用し、指導方法や授業形態の工夫改善を図る。	道徳の授業で学んだことを生活に生かしていると思う生徒が80%以上いる。 (アンケート調査)	B	○道徳の授業で、友達の見聞を聞いたり、議論したりして、自分の考えを深めることができたと感じている生徒は93%と目標指数を上回る結果となった。これは各学年が連携しながら協力して道徳の授業に取り組み続けた成果だと思われる。	○心を育むことは、いじめや不登校などの生徒課題解決の一翼を担う。今後も継続的な指導をお願いしたい。	○本年同様、外部講師を招いた校内研修の機会を設けるなど教職員の授業力向上に努め、主体的・対話的で深い学びをめざした「考え、議論する道徳の授業」という面をより一層重視していきたい。また、命の大切さや社会のルールを守ることなど、学校の課題に即した授業を充実させ、地域に誇れる生徒の育成につなげたい。
進路指導	自らの生き方を考え、主体的に進路選択をすることができる生徒を育成するための計画的・組織的な進路指導をめざす。	全ての教育活動を通して、一人一人の個性の伸長を図り、自分の将来に対して夢や希望を持ち、目標に向かって努力を続ける生徒を育成する。	1. 「自分の適性や特徴を理解し、将来の目標を考えることができたか」 (全学年で実施) 2. 「自分の目標や夢に向かって、継続的に努力を重ねることができたか」 (全学年で実施) 3. 「自分の将来を想像し、中学卒業後の進路を考えることができたか」 (全学年で実施)	進路選択のための十分な情報収集を行い、将来就きたい職業のイメージを持ち、夢や希望を抱くことができた生徒が70%以上いる。 (アンケート調査)	A	○全ての項目で70%を上回り、評価指数は達成できた。 ○1年次では、自らの適性や特徴を捉える学習活動を展開した。2年次では、キャリア教育と学習指導の両面から、進路指導のアプローチを展開した。3年次では、将来を見通した進路選択に向け、学習を展開した。 ○系統的な取り組みによる成果だと思われる。	○外国にルーツをもつ生徒への進路指導について、将来を見据えた指導をお願いしたい。	○多様な選択肢がある中で、自らの適性や目標に適した進路選択が実現できるよう、進路指導を展開する必要がある。 ○そのためにも、生徒自身が自己理解をより深められるように活動内容を工夫して行く必要がある。
生徒指導	生徒の規範意識を高め、基本的な生活習慣の確立をめざす。いじめの未然防止や早期発見・早期解決に向け取り組む。	1. 集団のルールを守る事の大切さを指導徹底する。 2. あいさつの習慣を定着させる。 3. いじめは、生命や人権に関わる絶対に許されない行為であることを認識させる。	1. 場面や相手に応じてふさわしい服装や丁寧な言葉遣いをする。 2. 教職員や生徒会活動によるあいさつ運動を実践する。 3. 「学校生活に関する調査」を、学期に一度実施する。	1. 正しい服装ができる生徒を100%に近づける。 (アンケート調査) 2. 学校や家庭できちんとあいさつができる生徒を100%に近づける。 (アンケート調査) 3. いじめの解消率を100%に近づける。 (アンケート調査)	B	○今年度は「元氣な挨拶、服装を正す」を生徒指導の重点目標として取り組み、挨拶ができていると答えた生徒、保護者は80%以上であったが、教職員は約60%という状況であった。 ○服装をきちんとできているかという問いに対しては、生徒、保護者、教職員ともほぼ90%以上の高い割合であった。生徒たちの規範意識が高く、落ち着いた学校生活を送れていることが分かる。昨年度は、服装に関するルールについて、いくつか変更があったが、現在のところ円滑に運用されている。 ○毎学期、学校生活に関するアンケートを行い、いじめの積極的な把握、早期の対応に努めることができている。	○いじめ防止や、生命に関する教育については、指導を引き続きお願いしたい。安心して学校に通えることは、学力のみならず、健全な心と身体の育成に欠かせないことなので、徳島中学校への期待は大きい。	○挨拶について、教職員の「できている」という回答が前年度より減少していた。生徒たちがより自主的に挨拶ができるよう、あらゆる場面で挨拶の大切さや挨拶の仕方について指導していく。 ○適正な校則の運用・見直しが求められている中で、現在の服装についてのルール見直しなどを生徒会等とともに適宜検討していく必要がある。 ○日常生活の中の些細なトラブルも見逃さず全ての教職員が空白なく生徒を見守っていく体制づくりを行う。
安全指導	生徒自らの生命や安全確保に対する意識の高揚をめざす。	1. 交通ルール・マナーを徹底させる。 2. 自然災害や不審者出没などの緊急事態発生時、適切な行動がとれるように指導する。	1. 生徒会を中心に交通ルールの遵守や交通マナー向上を呼びかけるとともに、教職員による街頭指導を行う。 2. 自然災害や不審者対応についての安全指導と避難訓練を実施する。	1. 交通ルールが守れていると答える生徒を100%に近づける。 (アンケート調査) 2. 避難訓練が状況に合わせてスムーズに行えるようにする。 (実施調査)	B	○交通ルールやマナーを守って通学できていると回答した生徒は97%であった。しかし、保護者の回答では86%と生徒回答より低く、中学生の意識と実態にズレが生じていると考えられる。また、今年度は事故も多発し、保護者や教員からの記述欄の中には「自転車通学のマナーが悪い。」「並進をしていて危ない。」という意見があった。 ○災害時の避難方法を把握している生徒が79%、災害時のことについて、家族と話ができている保護者が81%であった。2回行った避難訓練はスムーズに避難することができ、生徒たちも学校での避難方法を把握することができた。	○道路交通法の改正を見越した、自転車等の利用に関する交通安全指導の実施をお願いしたい。変わる制度も理解し、子どもたちが自覚を持って、命と健康を守ることができるよう指導をお願いしたい。	○交通ルール・マナーは自分のため、他の人のために必ず守る必要がある。生徒も保護者も「100%できている」という評価ができるように、日頃の立哨や地域からの意見を生徒にきちんと指導し、ルールとマナーを守り、登下校できるようにしていく。 ○災害発生時の学校や通学時の対処のやり方を教えていく。また、家庭での災害時の対処のやり方を生徒に理解させ、家庭と連携させていくことが必要である。

保健指導	健康の大切さを理解し、自分の健康管理ができることをめざす。	自分自身の健康に対する関心を高める。	自己の健康管理ができる生活習慣を身につけるよう、継続的に指導する。	<ol style="list-style-type: none"> 健康の大切さについて考えることができる生徒を80%以上にする。 毎日、朝食を食べている生徒を90%以上にする。 (アンケート調査) 	B	<p>○「健康の大切さについて考えることができているか」の質問について、93%の生徒ができていますと回答し、目標値を達成している。今後も健康に関する啓発を行い、知識理解を深め、行動化に繋がられるよう工夫をしていく。</p> <p>○朝食摂取率は90%であり、目標値は達成している。しかし、「まったく思わない」（食べていない）と回答した生徒が4%いた。今後も、朝食の重要性について意識できるよう取組を続ける。</p>	○心と身体の健康管理の大切さを様々な方法で指導いただき感謝している。今後も、継続して啓発活動に努めるようお願いしたい。	○朝食摂取率は、就寝・起床時刻やSNS・ゲームの使用時間等も深く関係している。今後も、学級活動・各教科や学校行事、通信、掲示物等、教育活動の様々な機会を通して、基本的な生活習慣の確立に向けて、健康に関する保健指導を行っていく。 ○生徒が興味・関心をもつ啓発資料や教材等を作成するとともに、教職員による保健指導が実施しやすい環境を整えていきたい。また、家庭・地域と連携しながら、健康教育を充実させていく。
図書館教育	読書環境を整え、読書習慣の促進と定着をめざす。	<ol style="list-style-type: none"> 図書室を積極的に活用させる。 学級文庫を充実させる。 	<ol style="list-style-type: none"> 図書委員による掲示物の充実や呼びかけを徹底する。 図書委員による学級文庫の管理と設営を行う。 	<p>図書室を利用したことのある生徒が80%以上になる。 (アンケート調査)</p> <p>学級文庫を利用した生徒が80%以上になる。 (アンケート評価)</p>	B	<p>○図書室を利用したと回答した生徒は34%とまだ低い数値である。図書室の環境を整え、委員会の活動を通して利用者数を増やすことが課題として考えられる。</p> <p>○本を読んだ生徒の割合は、昨年に続き目標に近い数値となっている。引き続き委員会での学級文庫入れ替えの活動は今後も続けていきたい。</p>	○図書館教育に対して、生徒がさらに読書に親しみ、図書館を楽しみに利用できるよう、今後も工夫をお願いしたい。	○図書室の利用は少ないが、学級文庫を利用する生徒は多いというのが現状である。現在、委員会で行っている学級文庫の入れ替えは効果的であり、今後も引き続き行っていく。次年度以降は、図書室の利用者を増やすために、図書室を生徒が日常的に使える空間にしなければならない。新刊図書紹介の掲示などの委員会での活動を工夫し、図書室に足を運んでもらえるような環境整備が必要である。
環境教育	環境美化や環境問題に対する生徒・教職員の意識の向上をめざす。	<ol style="list-style-type: none"> ゴミが落ちていない美しい環境づくりに努めさせる。 節電を心がけさせる。 	<ol style="list-style-type: none"> 整美委員を中心に定期的に清掃チェックを実施し、美しい環境を保てるように指導する。 教室や廊下の照明をこまめに消すなど電力消費を抑えることができるように指導する。 	<ol style="list-style-type: none"> 美しい環境を自ら作ろうとした生徒の割合を100%に近づける。 (アンケート評価) 節電に努めた生徒の割合を80%以上にする。 (アンケート調査) 	A	<p>○意欲的に清掃に取り組めた生徒、ゴミの分別をしようとしている生徒の意識が非常に高く、徳島中学校を美しくしていこうとする意識付けが十分できていると考える。</p>	○快適な学校環境を維持できていることに感謝している。日頃の環境教育や環境美化の指導の成果だと思う。今後も継続した指導をお願いしたい。	○整美委員会、福祉委員会が中心となり校内美化、美しい環境作りをさらに意識付けしていくとともに、啓発活動にも積極的に取り組むように、引き続き教職員、生徒の意識を高めていきたい。
特別支援教育	生徒一人ひとりの理解に努め適切な支援をめざす。	<ol style="list-style-type: none"> 校内支援委員会を開催し、生徒理解に努める。 個々の生徒に対する理解を深め、支援の改善を図る。 全教職員が特別支援教育に関する理解を深める。 	<ol style="list-style-type: none"> 学年会を中心に各学年の支援を必要とする生徒の把握に努め、校内支援委員会を通じて共通理解を図る。 関係機関や家庭と連携しながら、適宜ケース会議を開き、個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成に努める。 特別支援教育に関する研修（校内研修や総合教育センターでの研修、その他講演会など）に参加し、理解を深める。 	<ol style="list-style-type: none"> 全教職員が個々の生徒の特性を把握している。 (アンケート調査) 教育相談等の記録を残し、個々のケースに応じた適切な支援が計画的に行われる。 (アンケート調査) 全教職員が特別支援教育について正しく理解している。 (アンケート調査) 	B	<p>○職員会議や学年会で、支援が必要な生徒について共通理解を図り、支援が必要な生徒と有効な関わりがもてた教職員が100%、個に応じた適切な支援を行うことができた教職員も97%と、おおむね達成できた。しかし、不登校や集団に苦手意識をもつ生徒は増加しており、まだまだ十分な対応ができていない部分がある。就学指導委員会やケース会議を開き、学年や学校全体で支援の方法を考えていく、という共通認識で今後も対応していきたい。</p>	○全教職員が個々の生徒に対する理解を深め、すべての生徒を支援し支える努力に感謝している。たいへんな責務ではあると思うが、教職員がチームとなって今後もご尽力いただきたい。	○生徒や保護者のニーズが多様化し、個に応じた適切な支援も多様化しているため、今後もそれぞれに対応できるよう、担任だけでなく、個々の実態に応じて学年や学校全体で支援の方法を考えていく必要がある。 ○不登校傾向の生徒も少しでも学校で困り感を感じずに生活できるよう、積極的にアプローチ方法を研究していかなければならない。そのため、校内特別支援委員会やケース会議、巡回相談員やスクールカウンセラーのアドバイスを頂きながら、専門機関と協力し、生徒や保護者の心に寄り添った、よりよい支援ができるよう、引き続き教職員の意識を高めていきたい。

評定の基準 A：十分達成できた B：おおむね達成できた C：達成できなかった